

第二回小学生作文コンクール「海外に紹介したい日本のこと」
〈優秀賞・低学年の部〉

日本の味

学習院初等科 三年 兵頭 春翔

「シューシュー。」

「ねえ、まだ？」

「あと八分むらしたら出来あがりよ。」

ぼくは、おなべのふたの穴からふき出しているけむりを見た。

ちいさいしぶきもはねている。「あぶないから、むこうにいったなさい。」ぼくは小さく歩いてソファにもどった。

「もういいわよ。」

とお母様の声があった。ぼくはぴよんとはねて、キッチンへむかった。

お母さまはりょう手に大きななべつかみをしておなべのふたのうえにのせていた。

「三、二、一、ジャジャーン。」

お母さまがふたをあけた。ぼくはおなべの中をのぞきこむ。もやーっと白いゆ気がぼくの顔をつつんであつくなつた。

「大せいこう。」

まっ白いごはんが光っていた。お米の一つぶずつに顔が書いてあって、行きよくならんでぼくを見ているような気がした。

うちのごはんは、火でたく。おなべのまわりにまたおなべをして火の上におく。かまどという昔のごはんのたき方になっている。すいはんきというきかいを使ってたくより、火でたいた方がすきだ。なぜなら、ごはんの色がまっ白になるからだ。それにまわりについたごはんは少しかたいけれど、よくかむとこげた味がしておいしい。また、ごはんだけで食べてもホットミルクみたいなあまい味がする。

テーブルについてたおばあちやまは、

「日本の味だね」

と言ってにこにこ食べていた。

お米は日本の行じにかかせない行じ食だ。ぼくたち日本人はむかしからお米をかこんで家族がなかよくくらししてきた。もしせかい中の人が日本のお米を食べてくれたら、地きゆうがもつとえ顔になると思う。せかい中の人に日本の味をしつてほしい。

◎審査委員長からのコメント…

「お米をかこんで家族が仲良く暮らす日本の良さが、会話の中に十分に表現され、心が温かくなります。」